

ハイデガー・フォーラム 第13回大会
ハイデガーとプラトンの対決（補遺） 納富信留

- 2頁「③ 主体の変容」に注追加： 本論で扱う「アレーテイア」論こそ「自己の変容 *sich wandeln*」の問題である（122, cf. 128）。「変容 *verwandeln*」については、同 125 も参照。
- 2頁「① 哲学、注4」への追加： ハイデガーがこのような「哲学・哲学者」への問いを深めたのが、プラトン『ソフィスト』読解（1924/5年冬学期マールブルク講義など）をつうじてであることは、容易に想像できる。
- 4頁7行「文脈に即した仕方ではない」への注追加： この比喩を正確に解釈する「正攻法」は取らないという言い訳（106）は、講義という便宜に訴えるもので、説得力を持たない。
- 5頁16行「忘却」への注追加： この「忘却」は、ハイデガーが指摘するように、主観的・心的体験ではなく、人間を襲い巻き込む「客観的な生起」である（148-149）。それは肉体を伴って生まれるという「人間」の出来事である。
- 6頁14-16行への注追加： この問いは、後に「非秘蔵性の本質」が人間の生起であると論じる時、同じ形で問われる（82）。私たちはその「人間」をいまだ知らない。
- 6頁下から4行への本文追加： 私たちが「非秘蔵性の本質から初めて人間とは何かを知る」（83）のだとしたら、非秘蔵性を示す「洞窟」、その読み解きこそが、私たちに人間を開示する。「洞窟の比喩を理解するとは、人間の本質歴史を、自己自身を最も固有な歴史の内で概念把握することを意味する」（85）。
- 8頁6行への本文追加： この箇所で、「陽光 *φῶς*」に何らかに対応する契機は「真理 *ἀλήθεια* とある *τὸ ὄν*」とされ、ハイデガーが対応させる「イデア *ιδέαι*」（113、図）ではない¹。ここではむしろ「思惟されるもの *νοούμενον*」がイデアである。ハイデガーの類比理解が不正確なため、この一節で示される「真理」を読み落としている。
- 9頁3行の後に新段落追加：
- 「アレーテイアとは何か」を問うことは、その根本体験が消失している現在において、ハイデガーにとって特別なことである。それは、かつてアレーテイアが生起したということの始源 *Anfang* とし、現在もそのまま生起であり続けさせるための、かろうじて可能な唯一の道である（132）。そうだとすると、その体験が生き生きとしていた時代にプラトンがこの問いに関わる仕方とは、大いに異なっていることになる。ハイデガーとプラトンのずれは、同じ問いを問うことが歴史においてもつ意味の違いにあるのかもしれ

¹ 補遺7（349）では「ウーシアーアレーテイア」が図の中程に書かれており、この箇所を意識しているかもしれないが、誤りに変わりはない。

ない。だが、哲学はそのように歴史的であるのか？

9 頁 11 行以下の書き換え（追加は下線部）：

他方で、第 4 段階において戻った哲学者が何を為すのかは、一向に判明ではない。ハイデガーがそこで洞窟の内に立ち返った「哲学者」について論ずるが、それは社会批判（あるいは、ソフィストという問題）であり、本来の哲学者のなすべき事柄についてではない。プラトンが一連の比喻を語ったのが「哲学者＝政治家」の誕生を示すためであった以上、そこで「政治＝洞窟の内にあること」が何なのか、が解明されなければならない。ハイデガーは、すくなくとも講義と論文でその点を論じていない。『存在と時間』を書いたハイデガーがここで「死」に注目しかけながら、それを深めなかったことは残念である。『パイドン』が、哲学を死の練習であるとしたその本来の「死」が、ここで関わらないと言えるだろうか。

洞窟に戻った哲学者の役割が、秘蔵と非秘蔵との対立(97-98)の指摘に止まるのなら、洞窟内の人々にとっては破壊的な暴露にすぎない。そこで社会や政治を行うことが意味を持たず、洞窟の外に連れ出すこと、あるいはそれを示すことだけが求められるからである。

9 頁下から 4 行「遂行しなければならない」への注： これまで「虚偽＝非真理とは何か」を探求したのは、ほぼプラトン一人である。「哲学の歴史において最初にして最後にプラトンが現実に歩んだ非真理への問いの道のり」(137-138)。ただしそれは、ハイデガーが扱う『テアイテトス』以上に『ソフィスト』の問いであった。「非-真理への問いは回り道ではなく、唯一可能な道であり、真理の本質へのまっすぐな道なのである。」(137)

9 頁末尾への注： 洞窟にもどった哲学者は「その影像が何であり、何の像かを識別する」とされる(520c)。これは像の真偽区別であろう。ハイデガーは、洞窟で哲学者が「影であることを、今や確定できる」(97)とするが、影像相互の真偽識別ではない限りで、精確に把握していない。

9 頁の下の図の後への本文追加：

『ソフィスト』はこうして、西洋哲学で初めて「言表、思考、現れ」の「真・偽」を分別し、真偽の規定に成功した²。ここで提示された「言表の真偽」が「対応説」と見なされるかが、まず問題である。また、仮に「アレーテイア（非秘蔵性）」としての真理が「洞窟の比喻」に見て取られるとして、それら二つの「真理」の間の関係が何かが問題である。少なくともハイデガーが批判したような、断絶や逸脱はないのではないか。

² ここで哲学史上初めて確定された「結合・分離」としての「真・偽」はアリストテレス『命題論』に受け継がれて定着する。